堺歴史探訪

与謝野晶子と故郷・堺の歌

古さとの小き街の碑に彫られ百とせの後あらむとすらむ

『春泥集』明治44年（1911）

訳：故郷である堺の小さなまちで私の歌は碑に彫られ、百年後にも私の歌はあり続けるでしょう。
この歌のとおり、晶子の故郷である堺には、現在23基もの碑がたてられています。
連載五回目は、堺にある晶子の碑をいくつか紹介します。この地図を片手に春のまちを歩いてみませんか。

住の江や和泉の街の七まちの
鍛冶の音きく菜の花の路

訳：住の江よ。そこには、和泉にある七まちの鍛冶の音を聞きながら歩く、菜の花の咲いた路がありました。

「七まち」とは、鍛冶屋が軒を連ねた七つのまちのことで、堺市北部にありました。堺に古くから続く鍛冶、そこから聞こえる音や菜の花を故郷の情景の一つとして晶子はとらえています。

▲水野鍛錬所 ❶

ふるさとの潮の遠音のわが胸に
ひびくをおぼゆ初夏の雲

訳：初夏の青空に浮かぶ白い雲を見ると、心の中に故郷の潮の遠音が響いているように感じます。

故郷の夏という季節や海は、晶子にとって印象的であったようです。歌碑の上には、晶子と等身大の立像もたてられています。

▲南海本線堺駅西口駅前広場 ❷

海こひし潮の遠鳴りかぞへつゝ 少女となりし父母の家

訳：海が恋しい。遠くで鳴る潮の音を数えていると、私が少女であったころ、父母のいる故郷の生家で生活していたころに気持ちが戻ります。

晶子が堺に住んでいたころ、生家の二階からは堺の海を臨むことができたとも語っています。晶子にとって、遠くで鳴る潮の音が故郷を思い出すよすがとなっています。

▲与謝野晶子生家跡 ❸

その他に、次のような歌が刻まれた碑もあります。

菜種の香古き堺をひたすらむ 踏ままほしけれ殿馬場の道

訳：昔の堺は菜の花の香りで満ちていたのでしょう。幼いころ歩いた殿馬場の道をもう一度歩きたい。【甲斐町】

和泉なるわがうぶすなの大鳥の 宮居の杉の青きひとむら

訳：私の生まれ故郷・和泉国の大鳥大社の境内には、杉が青々と生えている。【大鳥大社】

人とわれおなじ十九のおもかげを うつせし水よ石津川の流れ

訳：あの人と私、ともに十九歳の姿を映した石津川の流れよ。【石津神社】

石津川ながれ砂川髪をめでて なでしこ添へし旅の子も見し

訳：石津川、この流れる砂川を、私の髪をほめてナデシコを添えてくれた旅の子も見ていました。【石津神社】

堺の津南蛮船の行き交へば 春秋いかに入りまじりけむ

訳：堺の港には南蛮船が行き交っていた。一年を通し、どれほど多くの船が港に入り混じっていたことでしょう。【堺市立中央図書館】

潮の音や鍛冶屋の音、夏、菜の花、そして、父母のいる生家。晶子が故郷である堺をうたった歌には、堺で生まれ育ったころのみずみずしい感覚と、故郷を懐かしみ愛おしむ想いが詰まっています。

五回の連載を通じ、さまざまな面から与謝野晶子をみてきました。堺に生まれたこと、歌だけでなく評論や教育、古典研究など幅広く活躍していたこと、現在も碑として存在し続ける故郷への想いなどを取り上げました。

今年は晶子没後70年にあたります。時を隔てていても、晶子の功績は息づいており、彼女を身近に感じていただくきっかけとなれば幸いです。

（堺市文化課学芸員・岡﨑 智美）

■与謝野晶子の文学碑地図 ～生家跡周辺～

…与謝野晶子文学碑